

麦作技術情報 No. 2

令和8年1月5日
鳥取県産米改良協会

○穂肥

・穂肥Ⅰの施用時期が早過ぎると、低温によって施肥窒素の吸収が緩慢な時期と重なり、その後の栄養状態が悪くなることで稔実や登熟が劣り、精麦率が低下する場合がありますので施用時期を守ること。

・10月下旬播種のほ場がある場合は、幼穂が伸長を開始したのを確認し、幼穂長2mm程度(2月上旬頃以降)を穂肥Ⅰ時期の目安とする。穂肥Ⅱは、止葉葉耳の抽出が確認されるまでに施用すること。

・11月上旬以降の播種では、幼穂長が2~4mm(2月下旬頃)を穂肥Ⅰ時期の目安とする。穂肥Ⅱは、止葉葉耳の抽出が終了する頃を晩限として、3月中旬頃を目安に施用すること。

※ 暖冬によって、幼穂伸長開始時期が早い場合も、追肥後の低温に遭遇するリスクを低減するため、気温の推移予測と幼穂伸長の経過を確認しながら、穂肥施用の目安になるべく近い時期まで待った方がよい。

※ 小麦は、穂肥Ⅱまでビール麦の施肥体系に準ずるが、パン等の加工適性向上を目的としたタンパク質含有率の向上が必要であり、開花期の実肥が有効である。

○排水対策

・定期的にはほ場を観察し、ほ場表面や明渠に滞水が見られる場合は速やかに排水を促すこと。

・明渠と排水溝の連結を定期的に行うこと。

I 天気概況

1 気象経過

11月上から中旬の平均気温はほぼ平年並で、11月中旬から12月中旬までの日照時間が平年よりやや多く、11月下旬及び12月上旬の気温はやや高めとなった。ほ場の準備が始まる10月下旬から播種適期の11月中旬にかけて降水量が平年より少なかったため、播種作業は比較的順調に進捗した。

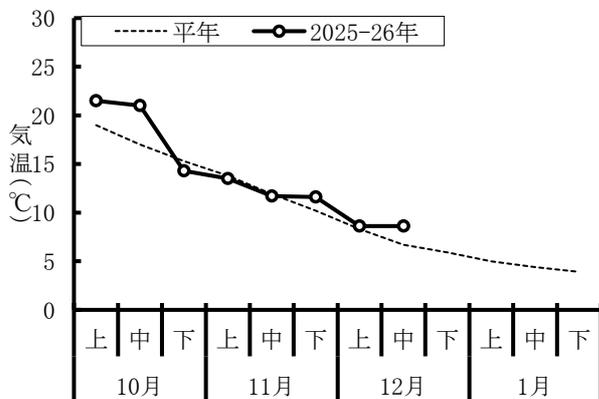


図1 2025-26年日平均気温(倉吉)

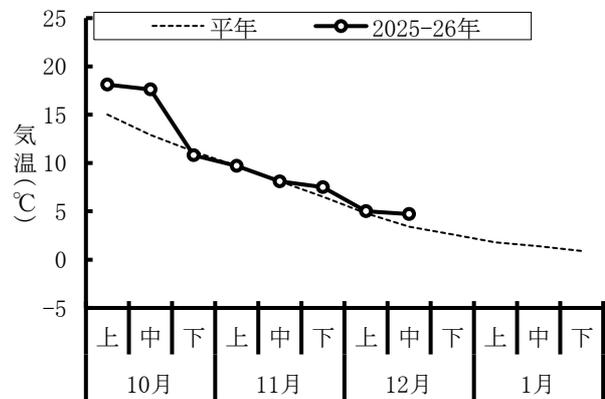


図2 2025-26年日最低気温(倉吉)

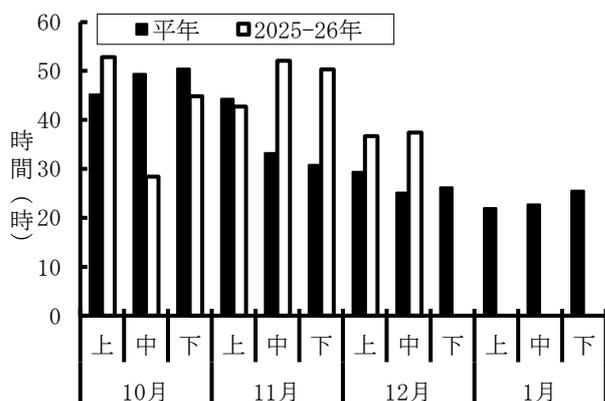


図3 2025-26年旬別日照時間(倉吉)

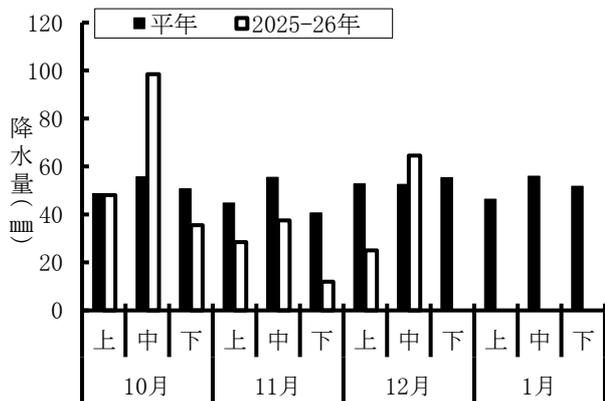


図4 2025-26年旬別降水量(倉吉)

2 気象予報

中国地方 3か月予報 (1月から3月までの天候見通し)

令和7年12月23日
広島地方気象台発表

<予想される向こう3か月の天候>

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。
この期間の降水量は、山陽で少ない確率50%です。

1月 山陰では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。山陽では、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
降水量は、山陽で平年並または少ない確率ともに40%です。

2月 山陰では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。山陽では、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。
降水量は、山陽で平年並または少ない確率ともに40%です。

3月 山陰では、天気は数日の周期で変わるでしょう。山陽では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<向こう3か月の気温、降水量、降雪量の各階級の確率(%)>

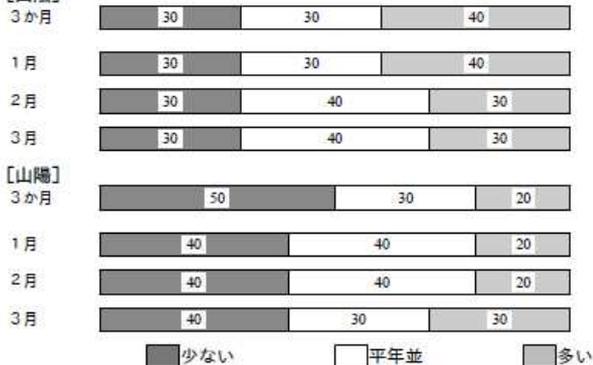
<<気温>>

[中国地方]

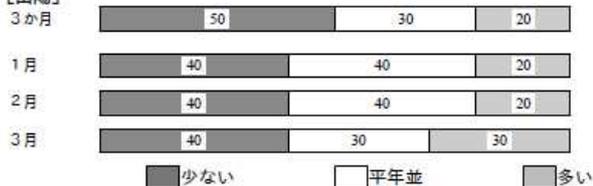


<<降水量>>

[山陰]

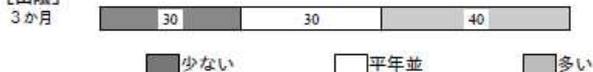


[山陽]



<<降雪量>>

[山陰]



II 生育概況

【現地ほ場】

播種適期の好天によって播種作業は比較的順調に進捗し、11月下旬播種の一部排水不良ほ場では湿害による部分的な苗立不足や生育不良が見られるものの、全般的に出芽と初期生育は順調である。倉吉市及び北栄町において11月第1～2半旬に播種された「はるさやか」は、12月下旬現在で幼穂長1～3mmとなっており、同時期播種の平年と比較するとやや早い。

【農業試験場】

11月7日播種「はるさやか」は、12月9日現在3.2葉期で、平年同時期比較の葉齢進展は平年並で、草丈が長く、幼穂形成は平年より17日早い12月19日に確認され、12月24日現在の幼穂長は1.5mm程度である。葉色は平年並だが、分けつが旺盛で茎数はかなり多く推移している。

表場内「はるさやか」の生育比較

品種	項目	播種約1ヶ月後(12月上旬)					過去平均比(差)
		R3秋播き	R4秋播き	R5秋播き	R6秋播き	R7秋播き	
はるさやか	播種日	11/17	11/8	11/9	11/11	11/7	-4
	茎数/m ²	240	293	395	288	626	206
	草丈cm	5.8	12.1	10.1	9.3	14.4	154
	葉色SPAD	44.4	39.2	48.8	40.4	42.9	99
	葉齢	2.5	3.8	3.4	2.1	3.2	0

Ⅲ 技術対策

1 排水対策

- ・雪や雨によってはほ場表面に滞水が続くと、湿害の影響で分げつが停滞し、収量が低下する。
- ・明渠等が土砂で埋まり、ほ場表面に滞水が見られる場合があるため、定期的に排水状況を点検し、明渠等の排水路の手直しを行うことで、速やかなほ場排水に努める。

2 穂肥

- ・麦の生育状況に応じて、適期適量の穂肥施用に努める。
- ・ほ場で幼穂の伸長程度を経時的に確認し施肥時期を判断する。

【暖冬によって幼穂の伸長が早い場合】

- ・低温や積雪の期間が短く、幼穂形成及び伸長が早い年では、穂肥Ⅰ施用の目安時期(2月上旬～中下旬)以前に、幼穂長が4mmを超える場合がある。しかし、幼穂長のみを指標として早い時期に追肥を施用することで軟弱な生育となった場合、以降の低温への耐性が低下し、その後の凍霜害による幼穂の夭折や不稔による減収を助長することがある。
- ・2月上旬以前は、低温によって幼穂伸長が停滞することも多いため、葉色の推移や幼穂伸長の経過を観察し、追肥後の極低温や長期間の積雪に遭遇するリスクを低減するため、気象予測を勘案しながら可能な限り追肥時期を2月上旬以降とする。

【降雪・積雪が続く場合】

- ・追肥施用の目安時期である2月に、長期にわたって積雪期間があった場合は、融雪後に可能な限り早く窒素肥料を追肥し、生育の回復に努める。
- ・雪害は、根雪が100日を越えると多く発生する。根雪が長引くと予想される場合には、融雪資材として育苗培土等の黒色を呈する資材を散布することで、融雪を促すと効果が期待できる。

穂肥の施用

《施用量》

- ・穂肥ⅠはNK化成C-12等の速効性肥料を使用し、窒素量で3.2kg/10aを目安に施用する。
- ・穂肥ⅡはNK化成C-12等の速効性肥料を使用し、窒素量で2.4kg/10aを目安に施用する。

《施用時期の目安》

播種時期	穂肥Ⅰ時期の目安	穂肥Ⅱ時期の目安
10月下旬	2月上旬頃	生育の進捗に応じて止葉の葉耳が確認されるまで
11月上旬 (1月下旬に幼穂長3mm以下のほ場)	2月20日頃 (幼穂長2～4mm時)	3月12日頃 (止葉葉耳の抽出が終わるまで)

《二条大麦の穂肥Ⅱの晩限》

- ・穂肥Ⅱの晩限は、穂肥Ⅰの3週間後まで(3月中旬頃)の施用であれば、収量・タンパク含量が同等であることを農業試験場・倉吉農業改良普及所(場内・現地ほ場)で確認している。穂肥Ⅱの時期(3月上旬)に積雪がある場合は、融雪後にほ場条件が整い次第施用すること。
- ・止葉の葉耳抽出終了前を厳守する。芒抽出や出穂が早まる場合は早めの施用を行うこと。

3 除草対策

- ・トゲミノキツネノボタンやヤエムグラ等の広葉雑草は、春の気温上昇に伴って生育量が増加していく。冬季間の出芽が多い場合には、麦の生育や収穫作業に支障が生じるので、処理時期を逸することがないように、ハーモニー75DF水和剤等の茎葉処理型除草剤を使用して雑草の繁茂を抑える。

除草剤の処理

《除草剤名》 ・ハーモニー75DF水和剤

《対象雑草》 ・一年生広葉雑草、スズメノテッポウ

《施用量》 ・10a当たり5～10gを水100Lに溶かす(単用は7.5～10g施用がメーカー推奨)

《施用時期》 ・播種後～節間伸長前まで、但しスズメノテッポウ5葉期まで

《展着剤》 ・必要に応じて展着剤を加用する

4 病害防除

(1) 網斑病(大麦)

- ・葉色の濃い過繁茂ほ場で注意が必要である。特に、暖冬で麦の生育量が多い場合にリスクが高い。
- ・発生ほ場では、病気が蔓延する前にチルト乳剤 25(1,000 倍、収穫 21 日前まで、1回)を散布する(展着剤を加用のこと)。

5 新品種「はるさやか」への転換

ビール麦奨励品種は、令和 7 年秋播から「はるさやか」へ全面転換しています。現時点で、栽培管理の内容に「しゅんれい」からの変更点はありませんが、タンパク質含有率の低下や未熟粒の発生をまわかないように、追肥の時期、窒素分量が適正となるよう徹底しましょう。

二条大麦奨励品種候補「はるさやか」の選定

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

鳥取県で作付けされている二条大麦「しゅんれい」は、収量・品質が安定している一方で、オオムギ縮萎縮病を引き起こすウイルス I～V 型の内、III 型に罹病性である。本県で III 型の発生は確認されていないが、近県では発生が相次いでおり、抵抗性品種への切替が最も有効的な対策であることから、I～V 型に抵抗性を有し、かつ栽培特性に優れた品種を選定する。

(2) 情報・成果の要約

「はるさやか」は、オオムギ縮萎縮病 I～V 型に抵抗性を備えており、1 1 月上中旬播きの栽培特性は、成熟期は 3 日早く、穂数は並、千粒重は大きく、多収で、容積重は大きく、粒張りに優れ、品質は並である。

2 試験成果の概要

「しゅんれい」と比較した「はるさやか」の特性は以下のとおりである。

- (1) 出穂期は 6 日、成熟期は 3 日早い(表 1)。
- (2) 稈長、穂長は並で、倒伏程度も並である(表 1)。
- (3) 穂数は並だが、千粒重が大きく多収である(表 1)。
- (4) 容積重が大きく粒張りに優れ、外観品質及び検査等級は並である(表 1)。
- (5) タンパク質含有率は 1% 程度低いが、ビール麦の基準値内である(表 1)。
- (6) 現地における栽培特性は、千粒重がやや小さかったもの、その他の項目では、農業試験場内と類似した結果が得られ、穂数がわずかに多く多収で品質は並である(表 2)。
- (7) 現地産サンプルを用いた、実需の麦茶加工適性評価は並である(データなし)。
- (8) 2018～2019 年のビール会社による製麦・醸造試験の結果に問題はなく、2020 年にビール会社の契約対象品種となる「指定品種」に採用されている(データなし)。



図 1. 「はるさやか」の株及び穂標本

【参考】例年12月に死亡事故が多発しています。
冬の作業も危険が潜んでいますので、注意喚起をお願いします。

安全確認と予防対策で公道での 農機による死亡事故を防ぎましょう!

安全フレーム、安全キャブ付きトラクターを使用し、
低速車マークの設置、シートベルト・ヘルメット着用を
徹底しましょう。



トラクター等の整備不足や操作ミスが 転落・横転・追突の事故を引き起こします。

農林水産省の最新の調査データによると、近年
300人前後の方々が農作業中の事故で亡くなっ
ています。

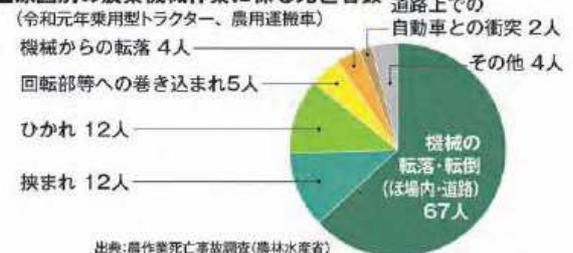
グラフからもわかるように、農作業中の死亡事故は
一般交通事故の約7倍、建設業の約3倍にも
及びます。

農機事故を未然に防ぐために備えるべき機器
(ランプ等)や操作時の安全確認と予防対策をもう
一度考えてみましょう。

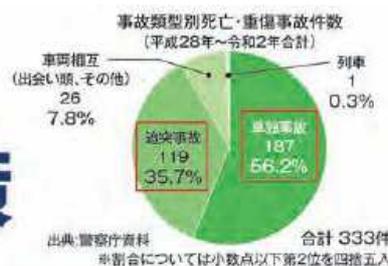
■10万人あたり事故死亡者数の推移



■原因別の農業機械作業に係る死亡者数



公道での農機による交通事故の要因と対策



事故発生の要因

公道での農機の交通事故は大きく分けて**単独事故**と他の車両からの**追突事故の2種類**があります。

単独事故

1.用水路等への転落

運転操作ミスや道路環境が悪いことにより、田畑や用水路等へ転落。

2.傾斜地での横転等

農機は通常の車に比べ重心位置が高いため傾斜地等でバランスを崩して横転。傾斜地等で自然に動き始めた農機にひかれる事故。



追突事故

夜間等における追突

夜間は後続車から農機が発見されにくく、追突事故が起る。昼間のトンネル内でも追突事故の事例がある。



事故を防止するには

事故防止の対策

公道での農機による交通事故対策の**3つのポイント!**
対策と準備が重大な事故を防止します。

ポイント1 確実な運転操作とブレーキ連結の確認

農機による死亡事故は、ハンドルやブレーキ操作ミスによる単独事故が多いため、道路状況等に応じた確実な運転を行いましょう。道路走行時は必ず左右のブレーキを連結しましょう。農作業前後に道路上を走行する際は、ブレーキ連結をしていないと、ブレーキを踏んだときに急旋回して転落、横転する事故につながる恐れがあります。

ポイント2 安全キャブ・フレームの装着とシートベルト・ヘルメットの着用

救命効果の高い安全キャブやフレームが付いているトラクターを利用しましょう(安全フレームは倒さずに使いましょう)。農機による交通事故においても、シートベルト着用の有無により死傷状況が大きく異なります。トラクター等の農機運転中は必ずシートベルトを着用しましょう。また、ヘルメットの着用にも努めましょう。

※車種によっては取り付けられないものもあります。



ポイント3 ランプ類や低速車マーク等の取り付け

一般車両との接触や追突を防ぐためには周囲に気づいてもらうことが大切です。「低速車マーク」や「反射板」を設置しましょう。また、作業機を付けて公道を走行するためには、基本的にランプ類の増設等が必要です。

